

平成三十年度  
八戸学院大学

一般入学試験（前期日程）

# 国 語

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちの誰もが完璧な記憶力をもつことにあこがれをいだきます。私が記憶について研究をしていると人に話しますと、最初に聞かれるのは、きまって記憶力をよくするための秘訣です。実のところ、私が人間の記憶に興味をもつようになったきっかけも、自分の記憶力をよくしたいという気持ちからでした。でも、1本本当に完璧な記憶力を身につけることは、それほど素晴らしいことなのでしょうか。

南米アルゼンチンに、幻想的な作風で有名なホルヘ・ルイス・ボルヘスという作家がいました。そんな彼の不思議な作品の一つに、完璧な記憶力をもつ主人公を描いた『記憶の人、フネス』という作品があります。

主人公フネスは、一度体験したことや見たものなど何でも、その細部に至るまで完璧に覚えることができました。そのおかげで、彼は「世界が始まって以来、あらゆる人間が持ったものをはるかに超える記憶」をもっています。

しかし、残念ながら、それらは互いに何の関連性もない「ごみ捨て場」のような記憶ばかりでした。あるとき、フネスは、それらを要約して分類することを決意しましたが、すぐに思いとどまりました。2なぜなら、あまりにも多すぎるために、その作業には途方もない時間が必要で、とうてい自分の生きている間には終わらないと思えたのです。

この作品で、ボルヘスは完璧な記憶をどれほどもっていても、それらが整理されていなければ、単なる3無用の長物にすぎないということを訴えたかったのだと、一般には解釈されています。A、このような解釈も間違いではないでしょう。

しかし、私には、ことさら努力しなくとも記憶を要約できるというXの重要性を彼が主張したかったように思われます。その理由は、一九世紀から二〇世紀のアメリカで活躍した心理学者ウィリアム・ジェームズの記憶に関する思想から、ボルヘスがこの作品の①チャクソウを得たと思われるからです。実は、ボルヘスの父親は外国語教

員養成所で、心理学を教えていました。そのため、ジェームズだけでなく、デイヴィッド・ヒュームやジョージ・バークレイといったヨーロッパの哲学者の思想にも詳しくあったそうです。

**B**

もジェームズの思想に触れたのではないかと思われます。ではジェームズの記憶に関する思想とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。ジェームズは、今なお心理学を学ぶ者の必読書である『心理学原理』という書物の中で、完璧な記憶をもった場合のマイナス面について、次のように述べています。

もし私たちがあらゆることを忘れないとすれば、ほとんどの場合、何も覚えていないのと同様に困ったことになる。ある一定の時間を要した出来事を思い出すためには、もとの出来事と同じだけの時間が必要になり、新しいことを考えることができなくなってしまう。

たとえば、「先週のパーティーはどうだった？」と聞かれた場合を考えてみましょう。もしフネスのように、先週のパーティーの記憶を完璧に覚えている場合、パーティーの最初から時間を追ってすべてを思い出すまで、パーティーの経過時間と同じだけの時間がかかってしまいます。ちょうど、パーティーを丸ごと**②サツエイ**した映像を頭から再生することと同じことです。こうした再生がすべて終わって、ようやく「つまらなかった」などと答えることになるのです。

これに対して、私たちの場合は、パーティーの中で印象に残っている出来事以外の細部は忘れているのがふつうです。そこで、覚えている一部分だけをもとにして、即座に「つまらなかった」などと答えることができます。このように、私たちはフネスとは違い、**③シヨウマツセツ**を忘れてしまうことで、もとの出来事を労せず要約できるわけです。

**C**

この自然にそなわった忘却力のおかげで、私たちは次々と新しいことがらを覚えたり、自分の考えを先に進めていくことができます。

忘却力による④オンケイはこれだけにとどまりません。私たちは生きていく中で、辛い出来事に出くわすことが多々あるはずで、人に受けたひどい仕打ち、最愛の人との別れ、などがその例でしょう。D、ありがたいことに、どれほど辛い記憶であっても、時間の経過にもなつて、次第に忘れられ、その辛さが軽減していくものです。フランスの作家オル・ド・バルザックの「多くの忘却なくしては人生を暮らしていけない」ということばを引き合いに出すまでもなく、このような忘却力がなければ、いつまでも過去の辛い記憶にとらわれ、私たちは人生を前に進めることができないのです。

私たちは時間の流れの中で生きています。E、今現在という時間は、次の瞬間には過去になってしまい、つい一瞬前まで未来であった時間は現在となります。それゆえ、私たちは現在という時間を⑤セイイツパイ生きなければならぬのですが、同時に、私たちは未来へ向って生き続けていく存在でもあります。人生の時間の経過にともなつて、私たちは、新たな人びとと絆を結び、新たな出来事に出くわし、新しいものごとを知り、自分自身を見つめ直しもします。4 こうした時間の経過にともなう変化のすべてを私たちが変えていきます。

このように、生きている限り、変わり続けていく存在である私たちが、仮にフネスのように過去の記憶をどれほど多くもつたとしても、そこにはいったいどのような意味があるのでしょうか。幼い頃に遊んだオモチヤがそのままの形で目の前に残っていたとしても、大人になつた私たちは懐かしさこそ感じるとしても、そのオモチヤで遊ぶことはないはずです。だとすれば、過去のままの姿の記憶がどれほどあつたとしても、それは「ごみ捨て場」のような記憶にすぎません。5 私たちは自然にそなわつた忘却力に感謝すべきであつて、フネスのような完璧な記憶力を何一つうらやむ必要はないのです。

（高橋雅延『記憶力の正体／人はなぜ忘れるのか？』ちくま新書）

問一 傍線①～⑤の片仮名を漢字に改めなさい。

問二 空欄A～Eに入る適切な語を次の中から選び、符号で記しなさい。

イ そして      ロ つまり      ハ やはり      ニ もちろん      ホ しかし      ヘ おそらく

問三 空欄Xに入る適切な語を文中より抜き出して記しなさい。

問四 傍線1の問いかけに対する筆者の回答を文中の語句を用いて百字以内で記しなさい。

問五 傍線2・4の文には係り受けの関係が不適当な箇所がある。誤りの箇所を含む前後の語句を抜き出し、正しく書き改めなさい。

問六 傍線3とは具体的に何を指しているのか。文中より抜き出して記しなさい。

問七 傍線5について、どうして「自然にそなわった忘却力に感謝すべき」なのか。文中の語句を用いて百三十字以内で記しなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ストア哲学の創始者ゼノンは、人生の目的を幸福においた。エピクロス派の祖エピクロスはそれを快樂に求めた。だが、ゼノンの考える幸福と、エピクロスのいう快樂とは、つきつめてみれば、結局おなじような内容であることがわかる。ゼノンが幸福とみなすのは、調和のとれた生活、自然になつた生き方で、そうすれば人はこの世でいちばん大切な魂の平安を得ることができるといふのである。他方、快樂を求めるエピクロスも、じつは眞の快樂を苦痛や悩みから自由になり、何のわずらわしさもなく心を平静に保つことに求めている。

A

二人はともに考えているからである。魂の平安をかき乱すのは、何より過度の欲望、感覺的な悅樂と

1 人生の目的を「遊樂する事に極まれり」とする西鶴の「哲学」にも、それが見てとれる。彼が「人びとの願いは金銭の力でかなわないことがあるか」といい、だからこそ金銭を大いに溜めよ、と説きながら、すぐそのあとで、人生は夢まぼろしのようなものであり、死んでしまえば金銀も何の役に立とうか、といったりしているのも、眞の幸福は何かということについて、さまざまな想いが彼の胸に①キヨライしていたからに相違ない。

それにしても、2 西鶴が押金主義とも思えるほど金銭にこだわったのはなぜなのだろう。一言でいうなら日本の社会が、というより日本の庶民が、それほど貧しかったからである。『永代蔵』、すなわち「新長者教」につづいて元禄五年、死の二年前に出版した『世間胸算用』で、彼は越すに越されぬ年の瀬、大晦日の庶民の表情をさまざまに描き出している。

一年の総決算日とされていた大晦日は、貧しい庶民にとっては、まさに甲地獄のような一日だった。掛取り（借金取り）は「鉄の草鞋でさえ履きつぶすぐらいに歩きまわり、世界を韋駄天のように駆けめぐって」借金を取り立てる。かえすあてのない貧民は、夜逃げどころか「昼逃げ」までして行方をくらまし、自殺したり、狂人のまねをして座敷

牢に入ったりにして、いたるところで悲喜劇を演じていた。おそらく、作者自身も、借金で死ぬ苦しみを味わったにちがいない。だからこそ、そんな目にあわないよう、年が明けたら「元日より胸算用油断なく、一日千金の大晦日おほつごもりをしるべし」と②ケイコクするのである。

大晦日には古道具市が立った。わずかなりと銭ぜにを手に入れて借金を払い年を越そうとする庶民たちは、なけなしの道具や衣類まで売ってしまう。古道具市は、いわば臨時の質屋のようなものだが、そこで売られるものを見ると、子供の正月用の着物から編み笠、小皿、二疊釣りの③蚊帳、果てはお不動さまの像までが持ちこまれる有様である。「こよひになつてうるほどのもの、よくよくさしつまつて、皆あはれなり」と西鶴は書いている。大晦日の夜になって売り出すというのだから、よほどさしせまつて困り果てた上のことになちがいないと思うと、どの品をながめても、みな見るも哀れなものばかりだ、というのである。

たしかに西鶴は長者物語を書いた。どうしたら身代を築くことができるか、長者になれるか、その才覚を説き、X浪費を戒め、乙骨折りをすすめ、金銭を溜めよと教えた。けれども、彼はけっして拝金主義者ではなかった。「人の家になりたいのは梅、桜、松、楓」などというが、そんなものより金銀米銭べいせんだ、といつてのけながら、他方では、たとえ万貫の金かねを持っていても、老後まで身体を使い、心を労して世を渡るような人は、人間の一生は夢の世だと悟らぬ哀れな人物で、いくら金があるからといって何の意味もない、と断じるのである。

B、西鶴には目的意識がちゃんとあったのだ。何のために金を溜めるか、何を目的にせっせと稼げ、というのか、その目標がしっかり見据えられていたのである。彼はそれを遊樂のためというが、その遊樂とは、かならずしも享樂、快樂ではない。琵琶湖に沈めてみても一升の壺には一升しか入らない、と彼はいい、人間何をしたって結構食っていけるのだから、「世に住むからは何事も案じたるがそんなり」と説くのである。

つまり、真の遊樂とは、何事にも心を労することなく、のんびり暮らすことなのであり、別言すれば、古代ギリシアの哲人ゼノンやエピクロスアフラシヤの求めた「心の平安」こそ、結局は西鶴の目標だったといえる。

『世間胸算用』のなかで、西鶴は前記のように裏長屋の貧しい人たちの大晦日を描いている。彼があらためておどろいているのは、貧しい長屋の住人が、貧しいがゆえに掛買いもできず、すべて現金払いで毎日を過すので借金取りに責められることもなく、Y弁解したり、詫言をいったりする必要もなく、のんびり年を越す姿だった。「楽みは貧賤に有と、古人の詞反古ならず」と彼は記している。3 楽しきは貧しさのなかにあり、といった古人の言葉はまことにその通りだ、というのである。

たしかに西鶴がいろいろな作品のなかで力説した処世術や人生観は、④ムジュンだらけのように思える。しかし、4 その人の偽らざる思想は、彼自身、どう生きたか、が何より証している。

では、西鶴自身はどう生きたのか。皮肉なことに、おびたしい浮世草子を書き残しながら、作者の西鶴については、確実なことがほとんどわかっていないのである。森銑三氏のように『好色一代男』を除いて、彼の作とされる大半を疑う研究者さえいる。が、ともかく、彼は大阪で人生の大半を送り、大阪で死んだ⑤生粋の浪花人だった。たぶん町人の出だったろうとされている。妻と三人の子供がいたというが、妻は若くして死んだ。妻の死後、再婚した様子はなく、子供にも先立たれて、西鶴の中年以降はまことに淋しい暮しだったようだ。

C、彼が人生で最も重視した晩年の生活は外見には侘しい一人暮らしではあったが、結構、平安な日々だったように思える。その様子は、弟子の北条団水が編んだ遺稿集『西鶴名残の友』に収められた随筆から充分にうかがうことができる。

晩年の住まいは「難波の鑪屋町」にあった。いまの大阪市東区槍屋町である。といっても長屋暮らしで、両どりの物音が手にとるよういきこえる陋巷だった。それでも、俳人の其角が江戸よりはるばる訪ねてきてくれたり、また、知人が酒樽を送ってくることもあった。「自分は下戸なのに」と、封を切ってみると、彼の下戸をちゃんと承知して、樽のなかに餅をつめて届けてくれたのだった。

芭蕉は西鶴の作品を評価しなかった。それどころか「西鶴が浅ましく下れる姿」と軽蔑していたらしい。が、西鶴

のほうは芭蕉を「只俳諧に思ひ入りて志し深し」と敬意を表している。結局、西鶴の志も、芭蕉とそう距ってはいなかったのだ。

西鶴は元禄六年八月十日に数え五十二歳で死んだが、辞世をこう詠んでいる。

浮世の月見過ごしにけり末二年

人生五十年というのを、二年も生き過ぎたというのである。自分は十二分に人生を堪能した、というわけである。しかし、あれほど長者教を説きながら、西鶴は長者と無縁だった。D、彼が何よりも重視した金銭とは、彼自身にとっては、あくまで「身過ぎ」、すなわち、浮世の手だてにすぎなかったのである。

(森本哲郎『生き方の研究』新潮選書)

問一 傍線①、②、④の片仮名を漢字に改めなさい。また、③、⑤の漢字の読み方を平仮名で記しなさい。

問二 空欄A～Dに入る適当な語を次の中から選び、符号で記しなさい。

イ つまり      □ そして      ハ しかし      ニ やはり      ホ したがって

問三 傍線甲、乙を使った慣用句をそれぞれ一つずつ記しなさい。

問四 傍線Xの対義語と傍線Yの類義語をそれぞれ漢字で記しなさい。

問五 傍線 1 について、西鶴の哲学とはどういうものであったのか。文中の語句を用いて四十字以内で記しなさい。

問六 傍線 2 について、西鶴にとって金銭とはどういうものであったのか。文中より五字前後で抜き出しなさい。

問七 傍線 3 とはどのようなことか。文中の語句を用いて九十字以内で説明しなさい。

問八 傍線 4 について、西鶴がどう生きたかを通して理解される西鶴の「偽らざる思想」を、文中の語句を用いて九十字以内で分かりやすく述べなさい。